

勝林寺寺報

「御伝抄」

の二と

●報恩講はこのようにして成立

浄土真宗のご門徒になじみ深い「報恩講」という言葉をはじめとも知られたのは、親鸞上人の曾孫(ひまご)で、本願寺第三世の覚如上人です。いまからおよそ六百九十年前「報恩講式(私記)」をあらわされたのがそれでした。宗祖の三十三回忌をいとなむにあたり、お徳をたゞえるために、法要の儀式や作法を一卷の書物にまとめられたものです。

もちろん、宗祖をしのぶお念仏のあつまりは、おかくれになつた直後からつづいていました。それを覚如上人は「報恩講」という形にされたのです。そしてその翌年あらわされたのが、今でも寺の報恩講のとき拝読されている、あの『御伝抄』でした。宗祖のご恩とお徳に対する感動と感謝の思いを込めたものでした。最初に書かれたものの奥書き(巻末のことば)に、ひとえに知恩報徳のために、とつけ加えられております。

それとともに、宗祖のご生涯を通して味わう信心のよるこびが、間違ひなく正しく伝えられていくことを、つよく念願されてのことだつたにちがひありません。

●「絵」と「詞」が分けられて

もつとも、『御伝抄』の名で親しまれるようになったのは、のちのことです。始めのものは『善信聖人親鸞伝絵』と題されておりました。たとえ東本願寺や高田の専修寺にこんにちまで伝えられている、国の重要文化財に指定されたものなどです。それらは、「絵詞(えことば)」のかたちでした。文章と絵が交互する横に長い巻き物にな

つていて、上下二巻にまとめられています。当時の最もオーソドックスな絵巻物の形式にしたがつてあらわされたものです。

ところが巻物を見るのには不便です。まず文字を読み、それから次に絵があらわれるという形式ですから、一度に大勢の人が見るといふわけにはいきません。人数が限られてしまうのです。

これではせつかく、絵でまのあたりにする宗祖のご生涯と、お念仏のよるこびも、より多くの人に伝えることはできません。そこで工夫がほどこされ「絵」と「詞(ことば)」とが別々に分けられるようになったのです。

こんにち、お寺の報恩講に、仏さまがおまつりしてある内陣よこの余間(よま) (左右の間)にかけられる四幅の『御伝抄』というのが実はその絵の部分なのです。絵巻物のなかに詞(ことば)と交互してえがかれていた絵の部分だけをとり出して、タテ長の画幅(かけ軸)のなかに、下から上へ順番に宗祖のご生涯が見られるように考案されたのでした。

こういうところは、この時代の画家の手腕がいかにすぐれていたかを物語っているといわれます。原画に忠実に、しかもヨコのものをタテにして、場面がかさならないように連続させていくのは、かなりな技術がいつたはずで、そうした技術が発揮されたのも、同時に多くのご門徒に宗祖のご生涯をしのんでほしいとの願いがあつたからこそだといえるのでしよう。

●「御伝抄」は何が書いてある

お寺の報恩講のときに拝読される『御伝抄』はこの絵巻物のなかの詞(ことば)の部分です。親鸞聖人のお生れになつてから、九十歳でご往生になり、お墓「ご廟堂」が建てられ、このお堂へ全国のご門徒がおまいりに集まつてくるまでが述べられてあります。上巻は八段、下巻は七段です。

ただ、この上下十五段にわかれておられる覚如上人のお気持ちだけは、たしかめておかねばならないと思ひます。つまり『御伝抄』のテーマともいふべきものです。

なるほど、ご誕生から往生へ、そして廟堂の建立へと、年代的に順序を追つたかたちです。それらを見てみると、ところが内容をよくよく見てみると、やはり上下二巻に分けられなければならな

つた理由がわかります。

きわめておおきつばな分けかたですが、上巻は宗祖ご自身がお念仏のご信心の生活に入られるまでのこと。こうした信心の生活に入られたのは、ひとえに、煩惱にさいなまれてばかりいる私たち凡夫のために、救わずにはおれないという阿彌陀如来さまのご本願(お誓ひ)をひろめねばならないため、そういう親鸞さまのご生涯は、阿彌陀如来さまの生れかわりであつたに違ひないといふ、覚如上人の確信がつよくうち出されております。

そして下巻は、その具体的ならわれとして、もつばら仏法をひろめることに生命がけでつくされた親鸞さまのご生涯と、親鸞さまがお浄土へおこえりになつてからも、その尊い仏法は、のちのちの世まで輝きつづけなければならぬといふ、あふれんばかりの思いがこの『御伝抄』に込められていることがわかります。

親鸞さまのご一代記だけがねらいなら、おかくれになつた場面をしめくればよいはずで、それを廟堂の建立と、全国のご門徒がお参りにくる情景まで書かなければならなかつたのは、そういうお念仏がひろまつてほしいという思いのあらわれにはかなりません。

ちなみに、この廟堂こそ、いまの東西本願寺のおこりなのです。

『御伝抄』は、ふるい文章言葉でつづられていますが、すぐ理解するといふことはむずかしいかもしれません。けれども、浄土真宗のご門徒とごこうしたお気持ちをかみしめ味わつていくと、私たちがこんにちのお念仏のよるこびのために、親鸞さまのご生涯とご苦勞があつたのだと、身近かによろこばれるはずで、

(野々村先生『御伝抄』で味わう 宗祖のお念仏)より

どんな草にも

名まえがある。

名まえがある。

名まえがある。



十一月のこよみ

- 一日 出石町文化祭
- 二日 坂本政二氏宅法事
- 三日 大石昌一氏宅法事
- 四日 菩提蓮動本部第二専門部会(木山)
- 五日 大谷本願寺研修
- 八日 光顯寺報恩講
- 九日 横山守氏宅法事
- 十三日 四日 連研資料作成委員会(木山)
- 十五日 六日 瀬成寺報恩講
- 十六日 おみがき奉仕
- 十八日 破皇教区九一組郡上組ご巡教随行
- 十九日 高畑寺報恩講
- 二十日 高畑寺報恩講
- 二十一日 勝林寺報恩講
- 二十二日 正徳寺報恩講
- 二十三日 高藤清忠氏宅法事
- 二十四日 四方寺報恩講
- 二十五日 宮嶋幸彦氏宅法事、仏具協働委員会
- 二十六日 みのりを御人會(龜井幸勇氏宅)
- 二十七日 奥美尾報恩講
- 二十八日 口栗尾報恩講・玉井亮氏宅法事
- 二十九日 保谷報恩講
- 三十日 森坂報恩講
- 三十一日 口小倉報恩講
- 十四日 玉日會(福成寺)
- 十六夜會(正徳寺)

「おみがき奉仕」に

ご参加ください

報恩講にそなえて本堂仏具の「おみがき奉仕」をいたします。

今年十一月十六日(日)

午後七時より

はじめます。

ご都合のつく方はご参加くださいますようお願い申し上げます。

勝林寺仏具、仏婦



「別修報恩講」にお参りして
もつたいない一日



「おばあちゃん、お見合いにでも行くんか」と中学生になつた孫娘からひやかされました。バスが迎えに来てもらう時間の三十分も前から道に立つて待つておりました。やつとお迎えるバスが来て乗つたら、みんなみんな昔からのきようだいな人ばかりで、もうそれだけでも有難いことでした。運転手の人（仏社員）が「如来さんからお迎えにきたんやで」といわれました。もつたいないことです。

お寺についたらすぐに「おつとめ」がはじまりました。七十以上のとしよりをよんでくださったはずなのに、おつとめの声はみんなはずんで若々しかつたです。ご院家さんのご法話のときはもう本堂がいつぱいになりました。それから仏社の先生が浪曲入りの趣如上人の幻燈を見せてくださいました。それから「おとき」がまた大変でありました。あとで聞いたら百三十人だつたそうですが、ほんとに「そでふり合わせ」「ひざつき合せ」のおときでした。仏婦の人人のほんとに心からのおもてなしで、ほんとにしあわせでありました。

ご院家さん奥さん、仏社仏婦のみなさんのご親切に、としよりみんな感謝しております。まあなんと今年はマンサの張つた舞台までできていてそこで次次といろんなものを観させていただきました。仏社会長さんの孫さんだそうですがその可愛いらしい舞姿はいまでも目にうかびます。寺の奥さんの日本舞踊、仏婦の人の銭太鼓、それから但東町農協の組合長さんがうたわれました。いちばんびつくりしたのはご院家さんです。民謡をうたわれましたが姿といい声といい日本一でした。それから出合の仏社仏婦の人がグループで民謡をたくさん聞かせてくださいました。小田の若い仏婦の方のおどりは、これはもう先生級でありました。その他いろいろ。仏婦の人のそろいの衣装の踊のみごとなこと。ほんとにほんとに有難い一日でしたこと。なんでも大事にして、来年のあの「別修報恩講」

にお参りさせてもらわんなんと思つております。家に帰つたら、孫娘がまだおきておつて「おばあちゃん、お見合どうやつた」といいましたので「あーあー、ええむこさんによろけようけ会うてきたわいな」といつてやりました。（一老人からの聞書）

笑いはなし

むかし中国の話です。魏という国の王様が、梁という国の大臣に、「お前にこれをあげようといつてヒョウタンの子をくれました。」

「これはいいものをもらった。お酒を入れて楽しもう」
大変よろこんだ大臣は、さつそくヒョウタンの種子をまき大切に育てました。
ところがこれは何と、大きな大きなおビヨウタンができました。大臣の身の丈の倍くらいもあるおビヨウタンです。
「これはとても酒の容れものにはならない。あの王様は何でこんなものをくれたのか。」と腹を立てて、このおビヨウタンを割つてしまいました。

莊子という人がこれを聞いて
「何と愚かなことか、ヒョウタンは酒をいれるものゝとて、このおビヨウタンは酒をいれられない。おビヨウタンのうちがわからぬとは、」
「魏の王様は、このおビヨウタンを舟にして、洪水のときこれで救われなさい、とブレゼントしてくれたのに。」

笑い話でしょうか
ひよつとしたら私自身、小さく凝り固まつた「わたしの考え」「私の思い」だけものを判断しかえつて小さなせせこましい窮屈な世界でしかくらせていないのではないのでしょうか。
その私に「これで生死の海を渡るのだよ」と、おビヨウタンが贈られてあるのかも知れませんが、

私の小さなえこじな考えから、宗教を批判したりばかにしたりしている人がいます。
「大を用うるに拙なり」と莊子に笑われます。
（勝林寺テレホン話）

報恩講のご案内

十一月二十一日 夜七時
二十二日 昼十一時

説教 松田 利彰師

いつものように送迎バスが出ます。誘いあつてお参りください。詳しい御案内は後日代議員さまをつうじていたします。

出石組第五期「連研」

四名 修了

十月八日、日高町光頭寺での勉強で第五期「連研」が終了しました。今期の修了は五十四名でした。そのうち勝林寺のご門徒は次の四名の方々です。二年間十二回（六日）の厳しい研修でしたがそれだけに身についたものも多かったと思えます。

- 生田 善七様（出合）
- 宮嶋 裕之様（口小谷）
- 坂本あき子様（坪口）
- 坂本さわ子様（坪口）

なお、「連研」というのは、二年間に六日、宗教・仏教・真宗などの講義、作法などの実習、話し合いなどを通してお念仏の推進者と育つための研修です。出石組では今まで五期を終つています。いま第六期の募集をしています。

いつも出合っている人に
有難とうと頭がさがり
ふつうのことにも
驚ろいて合掌できる
そんな人でありたい



私の小さなはからいを去つて如来さまのお呼び声を、もう一度聞いてみようではありませんか。
（勝林寺テレホン話）

報恩講のお料理

「いとこ煮」

おそらく昔の、ことにお百姓の貧しいくらしのなかでは、これが精一杯のおもてなしのごちそうであつたのでしょう。だから毎年一度の報恩講にはこの「いとこ煮」でお参りいただいたお同行（どうぎよう）をもてなし共にお念仏申しご開山親鸞さまをおしたいたのです。
ぜいたくな食生活のなかにいる私たちが、年に一度でも「報恩講」にこの「いとこ煮」をあじわい祖先のころを伺いたいものです。

作りかた

小豆は七分どおり煮ておく。
里いも、こんにやく、ごぼう、（大根）はサイノ目に切る。
すべてをヒタヒタの水で煮。塩で味をととのえる。

おつぽのおわんでいただく一段とよい。



「報恩講」には朱蠟をお供えするならわしになつています。寺に用意してありますから購入ください。

朱蠟

百五十円

